

はじめての海外発表：国際肝胆膵外科学会 (ブエノスアイレス)

夏目 誠治 (平成11年卒)

1. はじまり

その頃、江畑医局長(当時)はブエノスアイレスから届いたメールを前に苦悩していました。“シンポジウム：胆嚢癌に対する肝膵同時切除”と当然のように指示する内容。「明らかに誰かの作為を感じる。海外での発表なんぞしたことがない上にシンポはあり得ん…」本能的に拒否しました。その拒否メールは南米から隣の教授室に瞬間的にFwdされ、発覚、叱責、承諾と相成ったそうです。この時教授から「医員は自分の研究を発表せよ」という指令が下りました。ついでにこれも承諾したのは中間管理職としては仕方のないことだったのでしょう。選択基準は以下の3つ：仕事の結果がそれなりに出ている、仲がよさそう、能天気っぽい、とのこと。このやや一方的な観点で選抜されたのが高良先生(H11、現桐生厚生病院)と深見先生(H12、現豊田厚生病院)と私(現豊橋市民病院)でした。要は、この3人が快諾してくれそうだったというだけのことです。

2. 心折れる

私こと夏目誠治は医局生活も約1年半になっていました。肝胆膵外科の実地臨床を研修すると同時に、学位論文の仕事として与えられた胆管解剖のテーマ(マニアックです)も徐々に結果を出しつつありました。この

テーマに関して教授と医局長が時に激しく対立することが私の頭痛のタネでしたが、全般的には平和な生活を楽しんでおりました。そんな時にブエノスアイレスへのお誘いを受けたわけです。医局長の読み通り、高良・深見の両先生は即決承諾しました。彼らの目はキラキラと輝いています。煩惱の炎が燃えはじめました。未知の世界、南米の響きにエロスを感じている様子です。仕方ありません、この2人はそういう奴らですから。

私は返事を保留しました。海外発表は私の人生では全く想定しなかったものです。以前からの飛行機に対する根強い恐怖心(ハワイには行きますが)、英語に対する決定的な苦手意識、上司との密着度の高い旅行日程など正直気乗りのしないお誘いではありましたが、それ以上に、南米—アルゼンチン—ブエノスアイレス、その未知の響きがなんとなく治安が悪そうだと思っていたことも理由かもしれません。私の見た目は丸坊主で怖そうですが、ケンカとか争いごととかが極度に嫌いな性格です。より正確な術語を用いると“びびりー”になるかと思います。この温和な性格は幼少のころから奈良市内で多くの仏像・名刹に囲まれて過ごしたこと、長じて中高時代に奈良の東大寺(華嚴宗、みなさんこの宗派をご存知ですか?)の教えを受けたことと無縁ではないでしょう。

ため息混じりの私を尻目に、深見先生が翌日にはアルゼンチンの旅行ガイドブックを購

入し勉強し始めました。半年も前なのに。その早さと熱心さは私のカンにさわります。さらに鬱陶しいことに、私にブエノスの良さを主張してきます。行ったこともないくせに。高良・深見先生の強引かつ執拗な説得により頑な私の心も軟化傾向を呈してきたのは事実でした。その一方で、ネットや本の情報によると、誘拐、銃撃、殺人が日常的にありそうです。恐怖感が増強しつつありました。一行の中の2人が空手を過去にやっていたと聞きました。一人は寸止めだったので本気で人を打ち抜いたことがないと言うし、もう一人は喫煙とそのメタボ腹から動けないことは自明でした。全く安心材料にはなりません。かえって足手まといになる予感がします。

ある時、机の上に書類が置いてあるのに気がつきました。腫瘍外科の公式びんせんに毛筆体の漢字と英語で「柳野正人」と署名され、解読不能なご朱印が押されていました。和テイストに満ち溢れながら、“to whom it may concern”と聞いたことのないような難しい英語で始まり、格調高すぎて後光を放っています。学会宛での推薦状なのでしょうか？教授がわざわざ書いてくださったのでしょうか？さすがに断りきれない状況となり、最終的には参加を承諾しました。私の本意ではなかったのは確かでした。抵抗を続ける私を陥落させるために捏造された文書(医局長作)であることは後で知りました。しかし、このウソっぽい書類のおかげで学会参加費(外国の学会参加費はとてつもなく高いのです)が大幅割引され経済的に助かりました。

このようなわけで、私はアルゼンチンの首都、ブエノスアイレスで開催された国際肝胆膵外科学会ではじめての海外発表を経験しました。2010年春、35歳のことでした。一行は私夏目、高良、深見で3人の医員と江畑先

生、柳野教授ご夫妻の計6人のグループです。私たちとは別便で横山先生が二村先生の秘書の役割を兼ねて参加されていました。

3. はてしなく遠いブエノスアイレス

今回われわれが選択した飛行会社はデルタ航空で、ルートは名古屋→デトロイト→アトランタ→ブエノスアイレスで、所要時間は24時間という気の遠くなるようなものでした。それでも、普段の仕事から離れて旅行に行くという気軽さから最初はかなりテンションが高かったことを記憶しております。特にセントレアでのひとは楽しいものでした。肺塞栓になってはいけないとストッキングを購入したり、首が疲れるからと襟巻き型の枕を購入したり、当分食べられなくなるので日本食を食べておこうと豚骨ラーメンを食べたり。通常の海外旅行出発時のような楽しい時間を過ごしました。オッサンの旅がこんなに楽しいものになるのかと新しい発見でもありました。

今回の旅行で、昼夜が完全に逆転してしまう時差を考慮して「最後のアトランタ→ブエノスアイレス便までは寝ない」という立派な計画を立てました。定番の「深夜特急」を持ち込み備えていました。しかし、私のこの崇高な計画を邪魔するかのように押し寄せてくる睡魔、機内食、睡魔、退屈、睡魔との戦い。今は知りませんが、その時のデルタは長距離にもかかわらず映画がなく、席も狭く満席でした。全くいい印象はありません。最初の寄港地デトロイトに到着した時に私はすでに、ストレスでへとへとに疲れきっていました。それに対して、セントレアからビールを飲み、たらふく食べて、寝たい時に寝ていた高良先生の、なんとすっきりしていること

か。本当の敵は、長旅ではなく自分自身の中にあることを気付きました。欲望のままに過ごすことをお勧めします。

今回はみんな通路側の席に座るようになっています。隣同士にならないように予約されています。これは教授秘書の福田さんの「自分のペースで好きなように過ごせますように」とのはからいです。しかし、デルタ航空ではこの親切が裏目にでる可能性があります。江畑先生をふと見ると体が不格好に通路側に傾いています。隣に超巨漢のアメリカ人が座っています。デブは手すりを勝手に跳ね上げ、体の1/3をはみ出させています。鼻息は荒そうで熱そうです。こちらを見つめる目がすでに昇天しています。12時間も大丈夫なののでしょうか？(図1)



図1：米国でトランジット中。疲れ果てた著者(中央)、左は深見先生、右は高良先生。

4. 肉の町 ブエノスアイレス

私たちが宿泊するのは学会が開催されるホテルです。ブエノスの治安情報が全く不明だったので、敢えて選んでみたというわけです。経験したことのないような高級ホテルでした。なんと1泊1人約3万円です。椰野夫

妻を除く4人はそのみずほらしい格好のため明らかに場違いでした。もちろん今ではそのホテルではなくてもよかったですとわかりますが、当時は土地勘もなかったので仕方ないのです。周囲は非常に治安も良く、観光客が安心して旅行を楽しめる雰囲気でした。ブエノスアイレスは私が勝手に想像していたよりも遥かに過ごしやすい大都会でした。それとともに、非常に美しい街でした。ホテルのそばには運河があり、少し歩くとヨーロッパ建築の町並み 散歩しているだけでもとても楽しかったです。安全性に関しては正確にはよくわかりません。数日の観光客が過ごす程度のエリアは安全と思われれます。ただ、世界のどこにも存在するケチャップ強盗と呼ばれるスリ集団に遭遇する可能性は高いかもしれません。椰野教授が遭遇しかけ撃退した武勇伝は到着した初日のできごとでした。

私たちの心を捉えて離さなかったのは圧倒的な「肉文化」です。食事はあえて中華や日本食などを選択しない限りすべて「肉」でした。この国では「肉」=ステーキです。蘊蓄を加えると、アルゼンチンは口蹄疫がでている汚染国のため、日本はアルゼンチンの牛肉を輸入していません。口蹄疫が最近日本でも出ましたので、早くアルゼンチンのステーキ肉が輸入されることを熱望します。この「肉」にはいくつかの種類があり我々が良く選択していたものではチョリソー(ロース)、アサード(焼いた肉という意味らしいがカルビっぽい)、ロモ(フィレ)です。量は400-500gくらいが標準(最小)サイズ。日本で疑似体験するとなると、ブロンコビリーでしょうか。かなり大きいステーキがあります、特別サイズで420gです。一度挑戦してみてください。値段は日本の感覚からすると相当安いといえます。どのステーキ屋も外にメニューと価格



図2：アルゼンチンの牛肉。大きいです。おいしいです。

が掲示されているため、明朗会計で安心です。

肉質は日本人好みの霜降りは少なく、基本的には赤身重視です。付け合せという考え方は基本的に無いらしく、巨大な肉だけがドーンとお皿に単独で登場します(図2)。味付けは塩胡椒のみで、じっくり焼かれた肉は非常に美味です。獣の香りが強いかもしれませんがそれがまた食欲中枢を刺激します。赤ワインもおいしかったです。特に、マルベックというブドウのワインが個人的には好みでした。食事どきのステーキ(焼肉)屋はいつも現地人で満席です。われわれは一人一つずつ肉塊(部位は別々)を注文し、赤ワインを1-2本頼みました。味に変化をつけるために塊肉をお互い交換したりして2時間噛み続け、食べ続け、飲み続ける。日本ではそれなりの「大食漢」を自負していた深見先生のプライドもチョリソー600gで木っ端微塵に碎け散りました。お腹もはってつらいのですが、咬む筋肉すべてが疲弊しアゴが動かなくなります。嚥下力も落ちてくるように感じます。噛めなくなりふらふらになった我々の目の前を、特盛り肉塊をのせた大皿が通過します。「無謀でしょー、だれが食うの?」と思うと、サー



図3：完全観光気分。現地の英雄らしいが詳細は分かりません。

ブ先は現地の老夫婦ということとはしばしばありました。育った風土の違いはあなどれませんでした。旅行中、我々は頑なにこの肉塊生活を繰り返しました。最終日も肉&タンゴの覚悟を決めていましたが、椰野教授の“日本食がいいなあー”的な眼差しで、肉塊生活に終止符が打たれました。

私、深見、高良、江畑先生の4人は市内散策を毎日行い、ブエノスアイレスを満喫しておりました(図3)。学会には日本人を含めてアジア人が多い印象でしたが、街で会うことはほとんどありません。土地勘もみるみるつき、片言スペイン語も覚えつつあり、きままに行動できるようになりつつありました。ホテルから2kmぐらい離れた所に“Disco”なるスーパーマーケットのチェーン店を発見しました。肉は当然、小学1年生くらいの塊でゴロゴロ置かれています。真の目的は、肉塊生活で疲れ切った胃袋に束の間の休息を与えるべく、果物を購入することです。朝食は果物で軽くしておき、昼と夕方の肉食に備えることでした。他にも水、ワイン、パン、菓子など必要なもの全てが格安でそろいました。アルゼンチンは(肉以外は)何でも物価が高いのです。薬局で歯ブラシを購入しましたが、

300円ぐらいしました。また高級ホテルだけあって水がとてつもなく高価で飲めません。ホテルとスーパーとの間を徒歩で往復し、水を含めた物資を運搬するのが重要な日課でした。このDiscoは地球の歩き方にも書いてないので、覚えておくと便利でしょう。

5. 学会参加

今回、私(夏目)、深見、高良の3人はポスター発表です。一応、これが今回の主目的です。海外でのポスター発表は、張りっぱなしでトークはないものだよという風評をよく聞きます。今回も事前に指示はなかったので「張りっぱなし」と思い安心しきっておりました。現地で入手したプログラムを熟読すると何時にポスター前集合、司会者と討議せよと書いてありました。話が違い驚愕です。正直想定していなかったことなので、上手くしゃべれるかどうか不安でした。高良先生は持ち前のずぶとさで何とかなるでしょうと能天気です、深見先生は持ち前の準備のぬかりなさで自信にあふれていました。

高良先生は別のポスター会場で苛立っていました。ランチョンサービスで紙袋に入ったバナナとリンゴとコーラを会場で立ち食いしながら座長の到着を待っているのですが、定刻になっても司会者は現れません。注目すべき所見は、多くの日本人(のみならず世界各国)のポスターがはられていましたが、発表者はほとんど待機しておりませんでした。学会本部からの指示とは無関係に「張りっぱなし」で退散するのが世界の常識なのでしょうか？しばらくするとコーラ片手にジーンズ姿の背の高い女性が現れました。何となく南米の色香がふんわりと漂っています。早口で何かを質問してきたのですが、よく聞き取れ

ず、適当に返事したらどっかに行っちゃいました。どうも座長だったようです。「まあ少し会話したからいいか」と高良先生らしく納得し、発表終了となりました。少し離れたところで、愛知がんセンターの佐野力先生がやはりポツリと立ちながら「(座長が)こーへんがやー」と怒っている姿を目撃しました。怖いです。発表者も司会者も結構いいかげんなのは、海外共通なのかそれとも南米限定なのかはよくわかりません。誰か教えて下さい。

私の所に司会担当の2人の外人がにこやかに近づいてきます。日本のポスターと異なり一般聴衆などは一人もおらず、一外の仲間たちが心配そうにまわりをうろうろしているのが視界にはいります。私の受けた印象をそのまま日本語にすると「やあ君たち日本人？遠いところをはるばる来てくれてありがとう。いい仕事だねー。」といった感じでガッチリ握手。肩が触れ合う至近距離でがん見してくるので、困惑します(図4)。で、英語で色々質問をされます。こちらが拙い英語で一生懸命返答しているのを、にこやかに聞いています。にこやかな中にも、理解してくれようと努めていることと、名古屋の若造から何かを学ぼうという真摯な姿勢を感じます。非常



図4：発表中です。何言っているのかよくわかりません。

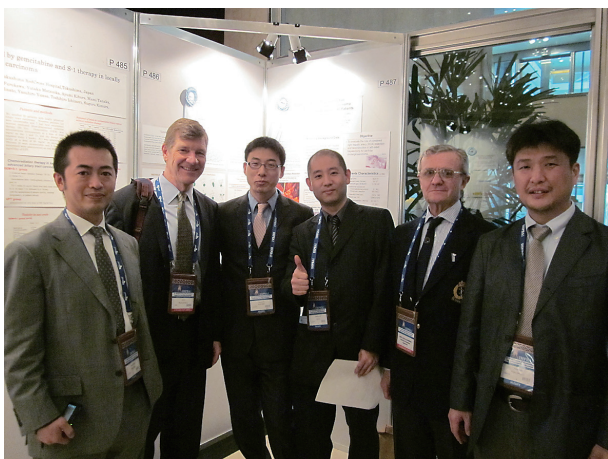


図5：みんなと記念撮影、右端は熊本日赤の先生。

に友好的な雰囲気であり、リラックスさせようと気遣いしているのがわかります。失礼かと思ひながら記念写真をお願いすると、気さくに応じてくれました。出会いは短時間でしたが、インパクトは強いものでした。あんな素敵なふるまいの大人になりたいと憧れます(図5)。

さて江畑先生の胆嚢癌に対する肝臓十二指腸切除の発表は朝8時からです。観に行くと明らかに緊張しており顔色不良でした。無意味にうろうろしています。外国でのシンポは各々発表したら質疑応答して終了するものという風評がありますが、壇上に机が並んでいます。その一つには“EBATA”と必要以上に大きな名札が張られていました。これが理由であることは明らかです。しかも早朝なのに満席です。前の発表者(日本の大御所)は口演時間を超過し司会者によって「長いって！何回も注意したでしょ！もー、終了～(夏目的意識)」と怒られ強制終了させられていました。今まで見たことのない荒技です。その時間はやってきて司会者に呼び出され静かに壇上に上がりました。時間を守らなければと忍ばせていた原稿を壇上で開けますが、PCの光が弱いのと原稿の字が小さくよく見えな

いようです。その後も壇上の机に背筋をのばし目線を遠くに置き凜とし、かつ静かな佇まいで座り続けていました。その姿に「耐える美」を見ました。

榎野教授は美しい英語で発表されており、大変感動しました。左3区域切除や動脈、門脈合併切除とう当科の看板芸のお話でした。どれも印象深い発表でありました。一見切除不能と思われる胆管像を示しながら、「誰かこれ切除できる自信のある人いますか？」と質問してから「右3区域で摘ったったよ」というパンチの効いた症例提示。会場からドヨメキが起こりなんだか晴れがましい気分になりました。他の国の先生方の発表もいくつか拝聴させていただきました。色々勉強になることもありましたが、流暢な英語で自信満々に発表するとそれだけでかっこよく見えることを体験しました。そんなのに気圧されてしまう自分自身の勉強不足と弱さも痛いほど思い知りました。

何より、肝胆膵外科の国際学会における名古屋大学腫瘍外科の重要なポジションを実感しました。特に肝門部胆管癌では当教室の論文が非常に多く引用され、業界の中心的役割を担っていることに驚きました。今回発表した内容は単なる私の学位の仕事でしかありませんでした。しかし論文になったら世界の胆道外科医が読むかもしれません、ひいては世界の患者に影響をあたえる可能性も否めません。明らかに以前とは異なった気持で研究・論文作成に挑みます。

6. イグアスの滝

帰国前の2日間はブラジルとの国境にあるイグアスの滝に行きました。今回の学会参加の真の目的はこれだったかもしれません。こ



図6：ボートからみたイグアスの滝。

これは、世界最大の滝で世界三大瀑布の一つに数えられており、イグアスとは先住民のグアラニ族の言葉で大いなる水という意味だそうです。アルゼンチン側の国立公園入り口で入場料を払い、広い広い園内を移動します。まずは、トラックに乗り、森を突っ切ってどっかの川に運ばれます。ここでボートに乗り込みます。川から滝を眺めたり、滝壺内にボートで進入するアトラクションです。「冗談でしょ 本当にそこまで行っちゃうの?」と言いたくなるほど滝に接近しみんなビショビショになりました。童心に戻り素直にはしゃげます(図6)。行かれる方は 水着とゴーグルと着替えは必携です。ボートツアーの後には、いよいよ滝まで歩いて行きます。滝が広範囲に分布しているので、遊歩道も非常に距離があります。川の水をかぶり冷えたのと、その日は小雨が降っていたことと、アップダウンのある道をえんえんと歩くので、体力を消耗します。ただ、色々な滝の表情を窺えるので全く飽きません。乳児や車椅子の老婆も連れてこられていました。子供にはつらい行程でしょう。「それは可哀そうじゃない? 滝見てないじゃん。」とってしまいました。



図7：滝前にて。教授が海パン一丁なのはなぜ?

最大落差80メートルの“悪魔の喉笛”と呼ばれる観光名所が最終目的地となります。ここで滝壺を上から見下ろします。柵に近づくと、水しぶきと風と轟音が激しく、嵐のようです。これを飽きずに眺め続けます。ここに吸い込まれたらなどと妄想し、股間を寒くさせるのも自由です。地球の大きさを直感し自然を畏怖し、みな口数少なくなっていくようです。疲れただけかもしれませんが(図7)。

その日の夜にブラジル側に車でわたりました。ジャングルの中にあるホテルはピンク基調のおしゃれなりゾートホテルです。またわれわれ6人の一行は(榎野夫妻を除き)疲労感を漂わせ滝と雨で濡れそぼり、みずぼらしい姿でした。2回目の場違いです。回りに店はないので、ホテルでまたお肉を食べてしまいました。あの有名なシュラスコです。塩味が強めなのと、多くの種類の肉があるのがアルゼンチンとの違いでしょうか。ブエノスアイレスのお肉の方がおいしかったように思います。これはブエノスの肉に精通した4人の共通の意見です。ホテルは滝の全貌を俯瞰できる絶好の位置取りです。翌日にはイグアスの滝の全容をしみじみ眺めつつ、遠くから聞こえる滝音に静か

に耳を傾けます。昨日間近で接した圧倒的な自然の脅威も少し離れると冷静に眺めることができます。熱気は醒めつつあります。もう日本に帰らなければなりません。

7. 最後に

旅行中たくさんの写真を撮影しました。みんなで撮影した写真をまとめて榎野教授にお渡しした際に「夏目君が一番たくさん写ったなー」とお声をかけていただきました。何を隠そう、当初行くことに最も抵抗していた私が、最も楽しんだような気がします。正直言って、勉強した記憶はほとんど残っていませんが、楽しかった数々の思い出は全く色あせることなく心に残っています。本当に行って良かったと思います。これまでちょっとだけ怖かった榎野教授や江畑先生、横山先生などの教官の先生たちの意外に(?)気さくな一面も知ることができ、少しでもお近づ

きになれたこともとても嬉しいことでした。このような楽しい学会に誘って下さって本当にありがとうございました。

「肉、肉でしょー」とオヤジ4人がいつも唱えていたあの頃を、ここ豊橋で懐かしく思い出しながら、この文章を書いています。たちあがる肉の香り・空気の質感・スペイン語のざわめき・太陽の強さなどの感覚が混ざり合って生き生きとよみがえります。あれはブエノスアイレスの熱病にうなされていたのでしょう。今食べたいとは思わないですもん。ブエノスアイレスが魅力あふれ楽しいところであることは確かです。私にはアルゼンチンに行く機会はまだ2度とないかもしれません。ブエノスアイレスやイグアスの滝についての有益な情報はガイドブックなどにも少ない印象があります。もし行かれる、または考えているようでしたら、ぜひ情報提供させて下さい。私が大好きになったアルゼンチンをぜひ好きになって欲しいからです。